

日常的な教育相談活動の充実

—コロナ禍におけるカウンセリングマインドを生かした学年の取組—

カウンセラー研究員 荒谷 健一（川崎市立犬蔵中学校）

I 主題設定の理由

1 生徒指導上の今日的課題

昨年度、未曾有の感染症に伴う臨時休業措置や緊急事態宣言による行動制限等、学校現場でも多くの変革を求められたことは記憶に新しい。この前例のない事態は長期に渡り、現在もコロナ禍と呼ばれる事態が続いている。実際、子どものメンタル不調について国立成育医療研究センターの調査(2020)によると、中高生の約3割が「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」と回答していることが明らかとなり、また小中高生の約3割が「すぐイライラする」、約1割が「自分の体を傷つけたり、家族やペットに暴力をふるうことがある」と回答し、コロナ禍のストレス反応が行動として現れていることが明らかになっている。こうした状況下において、文部科学省は学校に対し「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」を策定した（文部科学省 2020）。ガイドラインには、子どもたちのきめ細やかな健康観察やストレスのチェック、スクールカウンセラー等による支援を組織的に行う必要があることなど、臨時休業中ならびに学校再開後における児童生徒等の心身の状態の把握とケアの必要性が述べられている。

2 主題設定

私が主任を務める学年は、入学当時よりコロナ禍に直面し、約2か月の臨時休業期間を経て、中学校生活がスタートした。その後、学校行事が軒並み中止となるなど、リーダーの育成や社会性を育む機会が限られていた状況にあった。2年生となった現在は、落ち着いて学校生活を送っているが、学習面や対人関係でストレスを抱え、気持ちが不安定になったり不登校に陥ったりするケースも生じている。このような状況下だからこそ、教師が親身な態度で生徒と接することが大切であると考えている。

中央教育審議会答申(文部科学省 1998)において「相手の話をじっくりと聞く、相手と同じ目の高さで考える、相手への深い関心を払う、相手を信頼して自己実現を助ける」という4点がカウンセリングマインドの中心として挙げられており、「教員はこうした姿勢を備えることによって、初めて子どもたちとの間に共感的な関係をつくり、子どもたちから信頼される相談相手となり得る」と示されている。これらの理由から、教師によるカウンセリングマインドを生かした日常的な教育相談活動によって、生徒の変化をいち早く察知し、問題行動や不登校等の諸課題を未然に防止することができるのではないかと考えた。そこで、本研究では研究主題を「日常的な教育相談活動の充実」、副主題を「コロナ禍におけるカウンセリングマインドを生かした学年の取り組み」と設定した。

3 研究の目的

本研究では、学年生徒が不安や悩みを抱え込むことなく安心して学校生活を送ることができるようにするためには、どのように教師の教育相談に対する意識やスキルの向上を図ればよいのか、また学年全体で実践できる日常的な教育相談活動の手立てや形態について明らかにすることを目的とする。

II 研究の内容

コロナ禍における学校現場においては、本校も例外ではなく、日常的な教育相談活動の実施に対する時間的な余裕や体制が十分に構築されておらず、さらに今まで経験したことのない感染症対策等に追われ、充実した活動を行えていない現状がある。そこで今回、研究を進めるにあたり、生徒の実態に合わせて、日常的な教育相談活動を充実させ、生徒が一人で悩みを抱えることのないような校内体制を構築していくために、かわさき共生*共育プログラム、授業内のコミュニケーション活動やその他、学年として取り組める内容を検討し、日常的に実施することとした。さらに、効果測定や教師による見守り活動を通して、学年集団の変容について検証を重ねていくこととした。

1 研究の方法

(1) 調査対象・時期

市内中学校2年生5学級（在籍197名） 4月から12月

(2) 学年・生徒の実態把握

- ①定期教育相談事前アンケート（5月）
- ②かわさき共生*共育プログラム 効果測定（5月）
- ③定期教育相談事後アンケート（6月）
- ④hyper Q-Uテスト（9月）

(3) 実践内容

①校内職員研修の実施

事後アンケートや効果測定結果の見取りをもとに、教師向けの教育相談研修を行う。また、今回の研究主題である「カウンセリングマインド」についての意識の共有を図る。

②かわさき共生*共育プログラム他

4月より月に1～2回程度計画し、事前に担当教諭より指導案を提示し実施する。主に、情報カードを利用したコンセンサスやグループワークを中心に実施し、話し合い活動が深まるように計画する。また、活動の振り返りでシェアリングを行い、活動の内容が深まるように工夫をする。

③教師による見守り活動

休み時間、学年教師がフロアを巡回し、生徒の表情や行動等に注意して観察する。

④ひとこと日記

各クラスにて毎日実施し、生徒の「ひとこと日記」に対して、担任教師が丁寧に返事を書く。

⑤授業内でのコミュニケーション活動

昨年度より数学科ではアクティブラーニングを行い、学びあいの活動が行われている。他教科においても、コミュニケーション活動を重視した授業を展開することで、社会性の育成に努める。

⑥GIGA 端末の活用

コロナ禍により対面での面談や家庭訪問が難しいため、在宅での教育相談活動に活用できるようにする。

⑦学習室の活用

登校支援を含めて、個人のニーズに合った学習支援も行っていけるような活用を推奨する。

⑧定期教育相談

6月、10月の年2回、担任との対面形式で実施する。今回は事前アンケートと事後アンケートを

GIGA 端末を利用して実施し、質問項目に対する答えを分析しながら、傾向を把握し、生徒の状態や要望に合わせた教育相談を実施する。

⑨ スクールカウンセラーとの連携

週1日の出勤日に合わせて、悩みを抱える生徒や不登校傾向のみられる生徒及びその保護者とのアセスメントやカウンセリング技法について相談し、対応を検討する。

2 研究の実践

(1) 実態と課題の把握

① 第1回教育相談事前アンケート（5月）から

6月の教育相談前に事前アンケートを実施し、その結果を基に各担任による教育相談を実施した。アンケートの回答から見てきた学年の現状と課題を整理すると「自分を嫌いになることがある」や「学校でイライラすることがある」の設問においての回答から、自己肯定感の低さや普段の感情抑制ができていない生徒がいることが分かった。また、教師との心理的な距離感があることにより、悩みがあったとき相談しにくいといった生徒も少なからず存在していることが分かった。

② 第1回かわさき共生*共育プログラム効果測定から（5月）

A群に約8割がプロットされているが、D群に1割超の生徒がプロットされている（図1）。

各クラスとも、全体的に大きな差はないが、行事等の精選の影響から他者との関わりが不足し学級のまとまりを欠いていることは否定できない。また、感情統制は高いが、気遣い・サポートや言語的解決能力が低いことから、自分の伝えたいことを上手く相手に伝えられない生徒が多く、我慢を強いられている状態と考えられる。（図2）

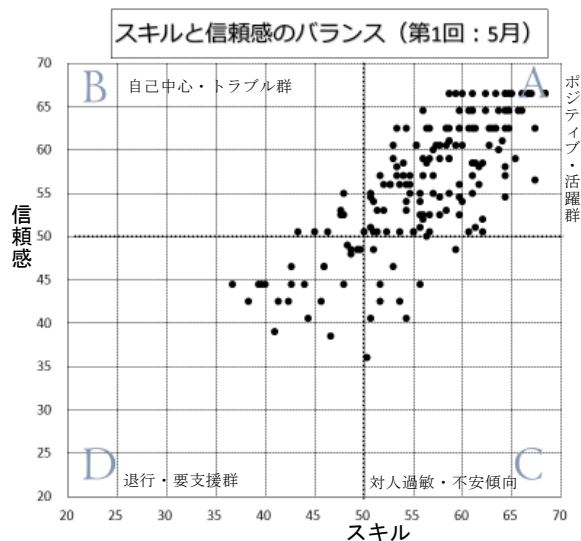


図1 効果測定1回目①

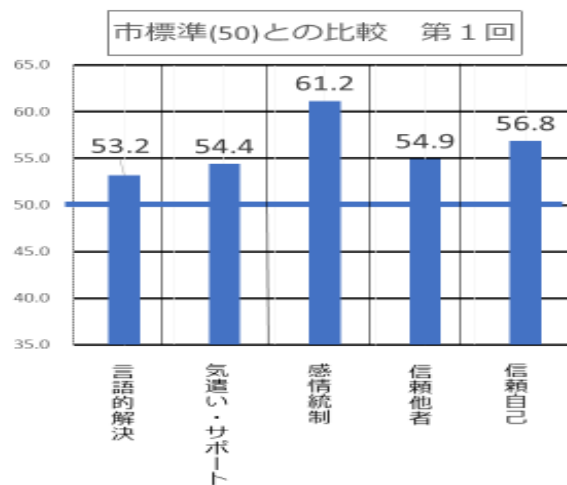


図2 効果測定1回目②

③ 第1回教育相談事後アンケートの分析（6月）から

教育相談後に生徒向けのアンケートを実施した。教育相談については、「おおむね満足している」との回答が多かったが、「教育相談後、学校生活の安心感が高まった」「教育相談は自分の悩みや不安解消に役立った」等の設問においては、肯定的な回答が多いものの否定的な回答が約2割存在することが分かり、今後の課題といえる。また、教師向けのアンケートでは、「生徒の悩みや不安は解消された」、「自分のクラスは生徒にとって安心できる場所」と認識している担任が高い確率で存在することが分かり、生徒の考えとの間に距離が生じていることがうかがえた。このことから、教師の教育相談に対する意識・スキル向上について、研修機会を設ける必要があると考えた。

④hyper Q-Uテスト 実施結果より

かわさき共生*共育プログラム効果測定の第1回目の結果において、他者との関わりが薄く人間関係に悩むケースが多いことや、必要以上に感情を抑制している生徒が多い現状があることが分かった。そこで、ソーシャルスキル尺度から集団形成に必要な対人関係を営むためのスキルがどの程度身に付いているかを深く追究しようと考え、hyper Q-Uテストを実施した。

学年全体では、学級満足度尺度（図3）における「学級生活満足群」は48%と全国平均よりも高いものの、「侵害行為認知群」が23%と全国平均よりも10%も高い結果が出たことから、規範意識の定着の不十分さが露呈されていると思われる。また、学級生活不満足群が4割を超えるクラスがあり、早急な対策を講じる必要であることもはっきりとなった。さらに、ソーシャルスキル尺度（図4）の「かかわり」における尺度は、全国平均よりも若干低く、人と関わるきっかけや関係の維持、感情交流の形成について、若干希薄な部分があるといえる。その反面、「配慮」の尺度については全国平均を上回っており、対人関係の基本的なマナーやルールは、ある程度守られているといえる。

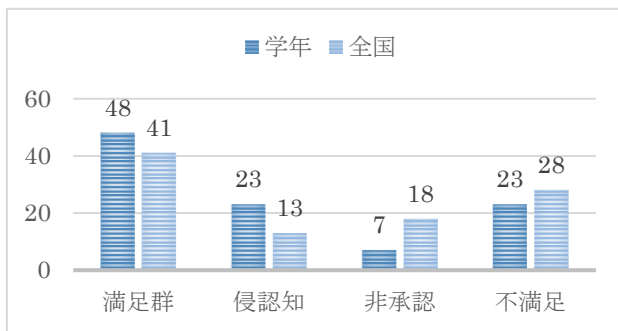


図3 学級満足度尺度 (%)

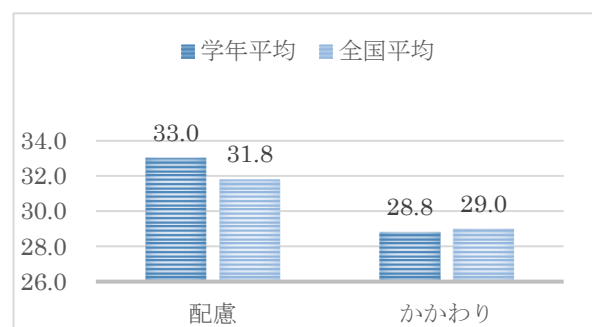


図4 ソーシャルスキル尺度 (%)

(2) 実践内容

①職員研修の実施

ア. 研修の実際 実施日時：令和3年7月26日（月）

第1部

テーマ：『教育相談の基礎基本と実際について』

形式：生徒指導担当者による講義、グループによるロールプレイ、シェアリング

内容：教育相談基本事項の確認、教育相談事後アンケート結果の分析、テーマ別ロールプレイ

教育相談の基本事項をスライドにまとめ、講義形式にて研修を行い、その中で、「カウンセリングマインド」について触れることで、意識の共有を図った。また、教育相談事後アンケートをもとに、生徒が考える教育相談に対する思いについて、現状を把握した。その後、テーマを決め、ロールプレイを各学年で行い、カウンセリング技法の確認や意見交換を行った。（図5）

第2部

テーマ：『ケース会議の実際とチーム支援について』

形式：学年ごとのグループによるグループワーク

内容：効果測定の結果をもとにした個やグループの見取り、担任による今後の決意表明

かわさき共生*共育プログラム効果測定の結果をもとに、担任がワークシートを作成し、各クラスの状態や気になる生徒についての情報共有などを行った。

イ. 研修の振り返り（教師へのアンケートより）

普段、なかなか時間を割いて見取ることができない生徒について、学年で共有することで、見えてなかった部分や支援方法について、貴重な意見交換の機会になった。担任による決意表明に対し

て温かい拍手で応えることで、とても良い雰囲気の中で研修を終えることができた。

〈教育相談について〉

- ・子どもともっと向き合うための準備や環境づくりが大事
- ・聞き上手になり、信頼関係を築いていくことが必要
- ・聞く姿勢やトーンも意識していきたい
- ・悩みを抱える生徒に対してのスキルを身に付けることは大切 等



図5 教育相談ロールプレイの様子

〈効果測定結果について〉

- ・数値の分析は必須で様々な角度から見取ることが大切
- ・全体の数値だけではなく、個別の観点の数値にも着目しなければならない
- ・生徒の内面を数値化し意見交換できたことは、とても有意義である 等

②かわさき共生＊共育プログラムの実践

豊かな自分づくりや学級におけるよりよい人間関係を築いていくためのエクササイズとして、かわさき共生＊共育プログラムを定期的実施することで、人間関係の構築に努めた。また実施中の生徒の様子や実施後の振り返りシートから、変容を見取り、学年教師全体で共有した。

③学年教師による「見守り活動」の実施

休み時間を利用して、「見守り活動」の中でたくさんの生徒とかかわりがもてるように心がけた。一人で過ごしている生徒や気持ちが落ち着かない生徒に目を向け、教員からアプローチを積極的に行い、関係をつくるようにした。また、給食時間はマスクを外した素顔の生徒の様子がうかがえる貴重な時間であることから、表情に陰りは見られないか、当番にきちんと取り組んでいるか、食欲が落ちていないか、逆に過食気味ではないかなど、食育の視点からも「見守り活動」を行った。

④「ひとこと日記」の実践・学級通信

各クラス担任が毎日の「ひとこと日記」に対して、コメントを入れながら個々の生徒とのやりとりを行っている。また、週1回学級通信を発行することで、クラスの様子を改めて生徒に知らせたり、家庭にクラスの様況等を知らせたりすることで、学校との繋がりを感じられるようにしている。

⑤授業内におけるコミュニケーション活動

学年教師に自身の授業で意識してきたコミュニケーション活動についてアンケート調査を行った。

- ・グループワークによる授業展開を実施し、誰もが発言できる雰囲気づくりを行った。(社会)
- ・ペアワークで、アイコンタクトや積極的に相づちが打てるような態度の育成を心がけた。(英語)
- ・ウォッチングカードを使い、友人の良いところを見つける活動を行った。(学活)
- ・ダンスの授業にて、自分の振り付けを他人へ教える活動を行った。(保体)
- ・演習の時間において、所属感を持たせられるよう、クラス全員で学びあいを行った。(数学)
- ・班員を交換して情報交流し、自分の班に持ち帰る形での話し合いを実施した。(国語)
- ・「生徒の興味のあること」に教師自身が興味をもち、話題をつなげて授業をした。(サポート級)

⑥GIGA 端末を利用した登校支援

不登校生徒を対象にGIGA 端末を持ち帰ってもらい在宅でのコミュニケーションツールとして活用した。9月～12月の間、在宅にて教室での授業の様子をオンラインで参観することで、クラスの一員であるとの所属感を持たせるようにした。また、放課後に担任と端末を通して、授業の振り返りや意見交換等を行うことで、教師との信頼関係を保てるようにした。

⑦学習室の活用

本校では、学習支援の一環として、学習室を開放している。空き時間の教員と非常勤職員が常駐

し、来室した生徒の対応をしている。教室復帰を視野に入れてはいるが、基本はその生徒のニーズに合った学習指導をしながら、支援を行っている。また、教室の授業の様子を学習室にてGIGA 端末で参観する試みも行い、教室での授業に参加しているという所属感を持たせるようにした。

⑧定期教育相談の実施

10月に第2回定期教育相談を行った。第1回教育相談の事後アンケートの反省を踏まえ、事前にアンケートを実施し、傾向や問題点を把握した上で、クラス全員との教育相談を行った。第1回と比べて、教室での相談環境や、事前に部活動顧問や教科担任からの情報を相談の材料にするなど、各担任の工夫が見られ、充実した教育相談となった。

⑨スクールカウンセラーとの連携

主任会にスクールカウンセラーが参加することで情報の共有をしている。そこで、気になる生徒についての助言をもらい、授業での観察やカウンセリング、家庭訪問等も連携して行うことができた。また、不登校状況のステージに応じた見通しを立てることで、支援の方向性を確認した。

(3) 学年生徒と学年教師の変容

①学年生徒の変容

ア. 第2回かわさき共生＊共育プログラム効果測定（10月実施）より

2回目（10月）の効果測定では、1回目よりも若干ではあるが、数値が全体的に低くなっていることが見て取れる（図7）。特に、「気遣い・サポート」が54.4→53.7、「信頼自己」が56.8→55.5を示す通り、2つの項目で数値が下がった。また、スキルと信頼感のバランスの分布においては、A群（ポジティブ・活躍）が77.4%→72.6%へ減少、D群（退行傾向・要支援）が13.6%→16.6%へ増加した（図6）。これらの背景を考えると、4月の新学年スタート時点からの行事の縮小や三密回避の為の様々な制限が影響していると考えられる。実際には、授業における対人での関わり等がかなり制限されるなど、コミュニケーションをとることに大きな影響が生じた。さらに、夏季休業中の緊急事態宣言の発出による大規模な行動制限により、生徒にとって楽しみにしていた部活動や、友人や家族との交流といったイベントが無くなり、大きなストレスを抱える要因にもなったと考えられる。また、夏季休業明けに実施した、生徒向けの教育相談アンケートでは、「コロナ禍の登校に不安がある」という設問において、「ある」と回答した生徒が3割程度存在するなど、登校に不安を抱えている様子が見られた。そのため、在宅にてGIGA 端末による授業配信を希望する生徒も少なからず存在した。学年においても、夏季休業後に新たに不登校傾向を示す生徒が数名出現したことから、危機感を共有し、生徒の現状を十分に把握することで、個に応じた支援をより一層行っていくという体制を確認した。

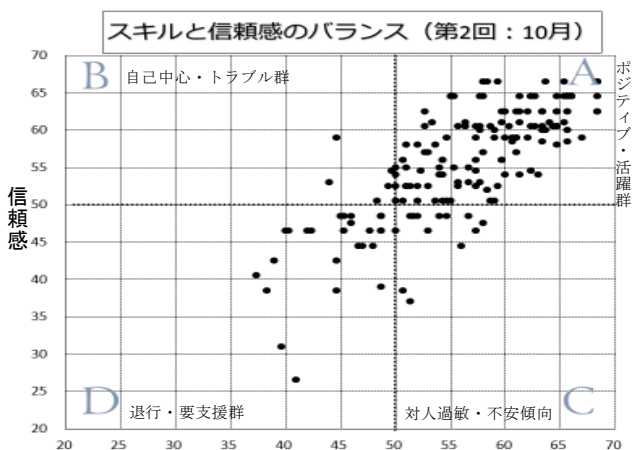


図6 効果測定2回目①

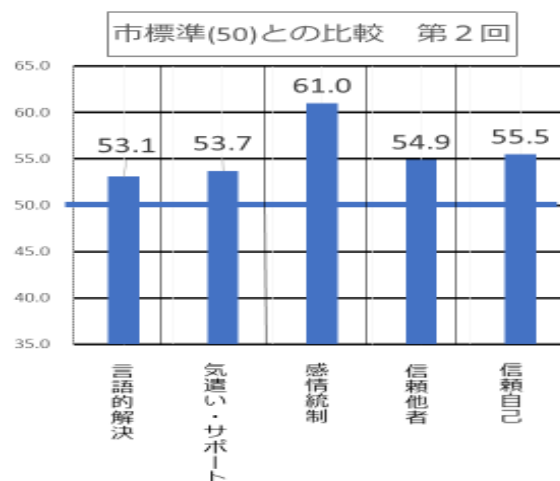


図7 効果測定2回目②

イ. 第3回かわさき共生* 共育プログラム効果測定（12月実施）より

3回目（12月）の効果測定（図8・9）では、すべての領域において数値が下がり、スキルと信頼感のバランスもA群は72.6%→60.7%と減少し、B群が2.9%→7.7%、D群が16.6%→21.4%と顕著に増加する結果となった。10月以降は緊急事態宣言の解除等もあり、様々な制限が徐々に緩和され、本来の教育活動に戻りつつある状態であった。数値が大きく変化した原因を考察してみると、様々な事象が考えられる。一つ目は、制限が緩和されたことでのコミュニケーション活動の再開による不適応ではないだろうか。もともと、対人関係が希薄だったところに様々な対人活動が介入してきたことで対応しきれない生徒が増加した可能性も否定できず、社会性を育む過程において、個人差が顕著であったと推測される。二つ目は、学級内における関わりが未だ少なく所属感が停滞していたことが考えられる。行事の精選の影響でリーダーの育成が十分にできず、互いの信頼関係が構築されていないことが大きな要因と推測される。また、「感情統制」の数値はほとんど変わらないものの、社会性や信頼度の数値が低下していることから、自分の感情を出せず、人間関係等で我慢を強いられている生徒が多い現状といえる。これらのことから、教師側の実践した手立が生徒の実態に合っていないことも一つの原因になり得るのではないだろうか。

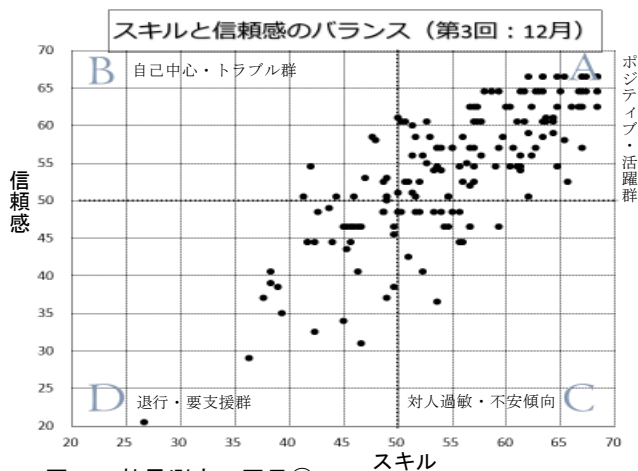


図8 効果測定3回目①

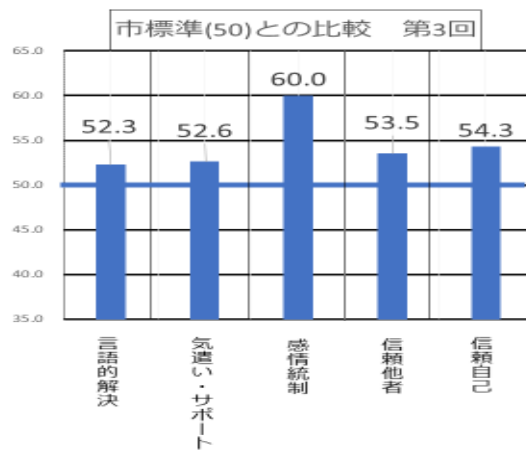


図9 効果測定3回目②

②学年教師が考える変容や効果

効果測定では期待していた数値が出なかったが、教師側の効果として、下に示す通り教育相談活動に対する意識が変わり、生徒の変容についても大きな手ごたえを感じていることが分かった。

<p>Q. hyper Q-U テストや効果測定の結果を踏まえて、日常的な教育相談活動を進めたことについて</p>	<p>Q. 生徒とのかかわりの中で、何か変わってきたことや教育相談活動の効果について</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 感覚的ではなく、データ分析で客観的に生徒の一面を把握し指導するのは意義のあることだと思う。 ・ 人間関係の配慮や日常的にカウンセリングマインドの意識をもって生徒に接するようになった。 ・ 効果測定の結果を通して、普段感じることができなかった生徒の一面を知ることができた。 ・ 現状を把握することで生徒指導に踏み切る際の自信向上に繋がった。 ・ 生徒の内面での成長を日常的な教育相談活動の結果として客観的に見ることはできたのはよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒同士の関わりが増えてきたと感じる。 ・ 授業内での挙手が増えてきた。 ・ 難易度が高めな課題に、前向きな態度で取り組むようになった。 ・ 過半数の生徒があいさつを返すようになった。 ・ 要支援の生徒に対し、寛容に受け入れながらうまく付き合うことができるようになった。 ・ 授業に後ろ向きであった生徒が前向きになり、教師の関わり方を変えると生徒も変わると実感した。 ・ 緘黙気味の生徒が人と関われるようになった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

この研究を通して目標であった「カウンセリングマインドを生かした日常的な教育相談活動によって、生徒の変化をいち早く察知し、問題行動や不登校等の生徒指導上の諸課題を未然に防止すること」については、おおむね達成できたと感じる教師は多いが、生徒向けの効果測定の結果はさほど好転せず、教師と生徒の意識に相違が生じる結果となった。

4月以降、日常的な教育相談活動に取り組んできているが、コロナ禍の影響により、話し合い活動等に制限がかかるなど、当初の計画通りにはいかなかった。また、学校行事についても、体育祭は規模を縮小しての開催、校外学習や合唱コンクールも中止等、生徒の社会性を育む機会がことごとく失われたことは、教師にとっても生徒にとっても大きな痛手であった。しかしながら、コロナ禍の中で、生徒と向き合い、カウンセリングマインドを持って関わり続けてきたことで、教師側の日常的な教育相談活動に対する意識が高まったのは、大きな成果といえる。さらに、日常的な教育相談活動の成果を見取るために、計画的に効果測定を実施したことで、数値による生徒の変容をもとに、個に応じた支援方法を共有、実践できたことも大きな成果だといえる。また、忘れてはならないのは、この1年間の研究を通して、生徒と教師の関係も良好となり、今まで以上に活気あふれる学年へと近づいていることが実感できるようになってきたことであろう。そして、コロナ禍であったからこそ特別に実践したのではなく、コロナ禍にとらわれずに、常にカウンセリングマインドを持って生徒に接していくことが教師に課せられた大きな使命であることを再認識できたことも成果のひとつになる。

2 今後の課題

本研究は終結となるが、今年度の実践を振り返り、なぜ教師と生徒の考え方に相違が生じたのかを含めて、来年度はどういう学年にしていくのかという展望についても検討を重ねていくことが、今後の大きな課題であると考えられる。今回研究対象とした学年は、来年度最終学年を迎える。生徒にとって思い出に残る卒業式を迎えることができるように、学年主任として教師間の連携を密に行い、生徒の実態に合わせた対応を柔軟に行う体制を整え、日常的な教育相談活動に取り組んでいきたい。

最後に、このような貴重な研究の機会を与えてくださいましたことに感謝を申しあげるとともに、適切なご指導とご助言をいただきました川崎市総合教育センターの皆様、及び勤務校の渡邊一浩校長先生をはじめ教職員の皆様に心より感謝し、厚く御礼申しあげます。

【参考文献】

- 文部科学省『生徒指導提要』 2010年
『いじめ・不登校を生まない かわさき共生*共育プログラム 効果測定活用ハンドブック』
川崎市教育委員会 2014年
河村茂雄他 『Q・Uによる学級経営スーパーバイズガイド』 図書文化社 2013年
大山 卓 『これ一冊でわかる教育相談』 ジアース教育新社 2021年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事 松崎 博晃